

東アジアを語ること、その問題点と可能性

孫 歌

一、議論の前提

1、東アジアは、どの地域を指しているか

日本、韓国、北朝鮮、中国大陸、台湾

ソ連（ロシア）、モーグル共和国、中国、朝鮮半島、日本、ベトナム

地域の違いによって、語るパターンが峻別され、発想法や視座の相違が示されている。

2、東アジアは、どのような歴史の文脈に置かれているか

儒教文化圏、西洋に学びかつ対抗する地域共同体

大東亜共栄圏という痛ましい記憶

社会主義革命の地域、冷戦期の国際政治関係の変動の場

3、東アジアは、自足できる地域なのか

開かれなければならない東アジア：アメリカの存在

アメリカを「内在化」させ、自ら利用する東アジア各国の緊張関係

二、東アジアの問題性

1、冷戦の実像に迫ることで、東アジアの構成単位を検討する

国単位の発想自体の不十分さ：朝鮮半島の分断問題、中国における台湾の分離主義などは、いずれも「民族国家」という単位に収まらない問題として、「東アジア」という地域の歴史に織り入れられた。その上、アメリカが東アジアに内在化するプロセスは、さらに国単位の発想を超えている。それを十分に認識するために、「東アジア」という空間が不可欠であるが、この空間の性質はいまだに曖昧なまま。

2、「極東の諸問題」から得た示唆

東アジアの構造を、冷戦構造の「不安定性」とのつながりで考えては？

「冷戦」というキーワードを歴史化すれば

3、激しく変動してきた「東アジア」の歴史をどのように処理すべきか

今日の日本、朝鮮半島（実は韓国が中心となっている）、中国（台湾との関係が無視されがち）に集中する「東アジア像」から、何がこぼれ落ちたか

三、東アジアを語ることの可能性

1、歴史を直視する場としての東アジア

国単位で避け続けた問題を直視するための装置

歴史の変動を直視するための装置

2、一国内部で処理できない問題を扱う視座としての東アジア

東京裁判、朝鮮戦争、台湾問題

3、国際関係という視座との相違点

「国の間」に止まらない問題

流動的歴史における「東アジア」というカテゴリーの相対的な独立性